



# 雨 森 芳 洲

—その生涯と人となり—

雨森芳洲庵  
館長 木村一雄

## 1. 生い立ち

芳洲は、寛文8年(1668)の5月17日、近江の国、伊香郡雨森の地に、医者<sup>きよりのり</sup>を業とする清納の嫡子として生を享けました。

芳洲が幼い頃に一家は京都に移住して、町医者を開業していたといわれています。芳洲も父の業を受け継ぐべく、12歳の頃から、当時、京都の名医と呼ばれた高森<sup>まさよし</sup>正因に師事して、医者<sup>きよりのり</sup>の勉強に精進していました。

ある時、師の高森氏が「蘇<sup>そとうば</sup>東波が『書を学ばんと欲すれば紙が費え、医を学ばんと欲すれば人が費える』』とっているが、これは真のことである。医者<sup>きよりのり</sup>というもの、薬の調合を間違えたり、誤診をしたりして、そのたびごとに死ぬほど辛い思いをして、やっと良医と言われるようになるのだ」と友人に述懐しておられるのを耳にした芳洲は、「私は、人が費えるというような仕事を一生の業とするわけにはいかない」と、志をひるがえして学者としての道を歩もうとします。

しかし、芳洲の双肩には、父を凌ぐ立派な医者になって欲しいという一家の厚望が、大きくのしかかっています。芳洲は心ならずも高森氏のもとで医者<sup>きよりのり</sup>の修業の日々を送っていました。

ところが、芳洲が17歳の時に転機がおとずれたのです。父の清納が急逝しました。芳洲は、意を決して江戸に下り、当時、幕府の儒官であり、朱子学派の重鎮

であった木下順庵<sup>ちじく</sup>の門、雉塾<sup>ちじく</sup>に入門するので

す。雉塾<sup>ちじく</sup>には、天下の俊才や英才たちが集い競っていました。その中で芳洲は、新井白石・<sup>むろきゅうそう</sup>室鳩巢・<sup>さかさばらこうしゅう</sup>榊原篁洲・<sup>ぎおんなんかい</sup>祇園南海と共に木門の五先生と呼ばれる高弟の一人に数えられるま



雨森芳洲



でに頭角をあらわし、師の順庵をして「後進の領袖なり」と称せしめたほどの秀才ぶりを発揮しました。

## 2. 対馬藩の儒者

元禄2年(1689)芳洲が22歳の時のことです。対馬藩主宗義真から、偉大な儒者を藩の儒官として迎えたいという要請が、順庵のところに届きました。順庵は数ある門弟の中から雨森芳洲に白羽の矢をたてたのです。芳洲は儒者として対馬藩に任官することになりました。対馬藩は、芳洲に江戸屋敷詰めを命じます。芳洲は、勤めの暇を見つけては、雉塾の門に出入りして相変わらず勉学に励んでいました。

芳洲が25歳になった時のことです。師の順庵は、芳洲に唐話の勉強をするために長崎に遊学することを勧めました。芳洲は、師の勧めに従って長崎に出向き、医師・上野玄貞に師事して、1年間唐語の勉強をしました。そして、翌年26歳で西海の離島対馬藩に赴任するのです。

江戸時代260年余り、徳川幕府は鎖国政策を

とり、外国との交流のない時代でした。しかし、隣国の朝鮮とは通信の国(信義をもって交わる国)として、唯一の国交をもっていました。そして、その交流の窓口は一切対馬藩であったのです。友好関係の維持、貿易・外交問題の折衝、信使来聘の案内護行などの重要な役目をすべて対馬藩が受けもっていたのです。

対馬藩が徳川幕府に代って、儒教の国である朝鮮と対等に交流をすすめるためには、「御国の儀、他方と違い朝鮮人毎年出合これあり候えば、大身・小身共に文学不都東に候ては差しつかえ候こと多く……」と対馬藩にとって儒学を興すことは緊急不可欠の要務となっていたのです。そんな時、芳洲は対馬藩の教学の担い手として迎えられたのです。

## 3. 朝鮮外交の外交官

ところが、芳洲が31歳になった時のことです。対馬藩は外交の実務を担当する「朝鮮方佐役」という役目を芳洲に命じました。ここに芳洲の外交官としての歩みがはじまります。

当時の外交の任にたずさわる者は、漢文の読み書きができれば、その責を果たすことができた筆談外交の時代でした。しかし、芳洲は、異国の人と直接に交わる外交の役にある者は「相手国のことばを知らず、如何に交隣ぞや」と朝鮮語の勉強に励むことになるのです。

36歳という中年になってから「朝鮮語の稽古」のために、3年間釜山の草梁倭館(日本人が常駐して、外交・貿易業



交隣須知等芳洲の著書



務に従事した役所) に在留して、日夜を分かたず朝鮮語の修得に精魂を傾けたのでした。

真夏の炎天下、学んだ言葉を書き写している時に、目がくらんで倒れそうになったこともありましたが、「命を5年縮め候と存じ候はば、成就せざる道理やあるべきと存じ、昼夜油断なく相勤め候」と、命がけで朝鮮語を勉強しました。3年経った芳洲は、慶尚道<sup>けいしょうどう</sup>の方言までも話すことができるようになり、周囲の朝鮮人から「雨森東は、語学の天才である」とまでほめたたえられたといえます。

また、芳洲は「交隣須知<sup>こうりんすうち</sup>」という日本語とハングルで対訳した日常会話の入門書4巻をはじめ、16冊に及ぶ朝鮮語の学習書をつくりました。特に「交隣須知」は、対馬藩で度々改訂され、明治時代にいたるまで、朝鮮語を学ぶ人たちの教科書にされていたといわれています。

一方で芳洲は、日本と朝鮮との中継点である対馬藩に、朝鮮語が話せることは申すまでもないが、学識豊かで朝鮮の人々からも尊敬される人格の優れた通訳を養成する必要があると考え、藩主に上申して通詞養成所まで創立させ、自らも生徒の指導に当たったのです。

『雨森東五郎より言葉稽古の者どもへ申し渡し候書付の覚え』に、朝鮮言葉稽古のやり方を、私から指図するようにお上から仰せつけられています」から書き起し、朝鮮語修得の必要性や自らが釜山に渡り、3年間学んだ言葉稽古の経験をのべ「日朝両国が誠をもって交際するうえで、通詞ほど緊要な役は外にありません。言葉さえうまくしゃべれたら通詞であると人々は心得ておりますが、そうではありません。なにぶん両国の交渉来歴、現在の朝鮮事情をよく心得ており、上よりお尋ねがあります時、適切な意見を申し上げるほどの見識がなければなりません」と、通訳は、言葉の伝達役だけではない、深い学識に裏づけされた自己の主張まで持っているような者でなければならぬことを生徒たちに強

調し指導したのでした。

江戸時代の慶長12年から文化8年にいたる200年の間に、朝鮮通信使という使節団の一行が、主として徳川将軍の代替りの時に慶賀の使節として来訪しました。

一行は、正使・副使・従事官の三使以下、学者・医者・書家・文人など総勢300人から500人という大使節団によって構成されていました。

ソウルを出発した一行は陸路釜山に入ります。釜山港には長さ45.5メートル、船幅14.5メートルという大型の帆船6隻が用意されています。それに分乗した一行は、海路を対馬から壱岐を経て、赤間関<sup>あかまがせき</sup>(下関)から瀬戸内に入り、鞆浦・牛窓など各地の港に入港して大歓迎を受けます。大阪湾では、幕府や各大名達が歓迎のために作った御楼船<sup>ごろうせん</sup>や川御座船<sup>かわごせせん</sup>という豪華な川船に乗り替えて、淀川をさかのぼり京都の淀で上陸します。

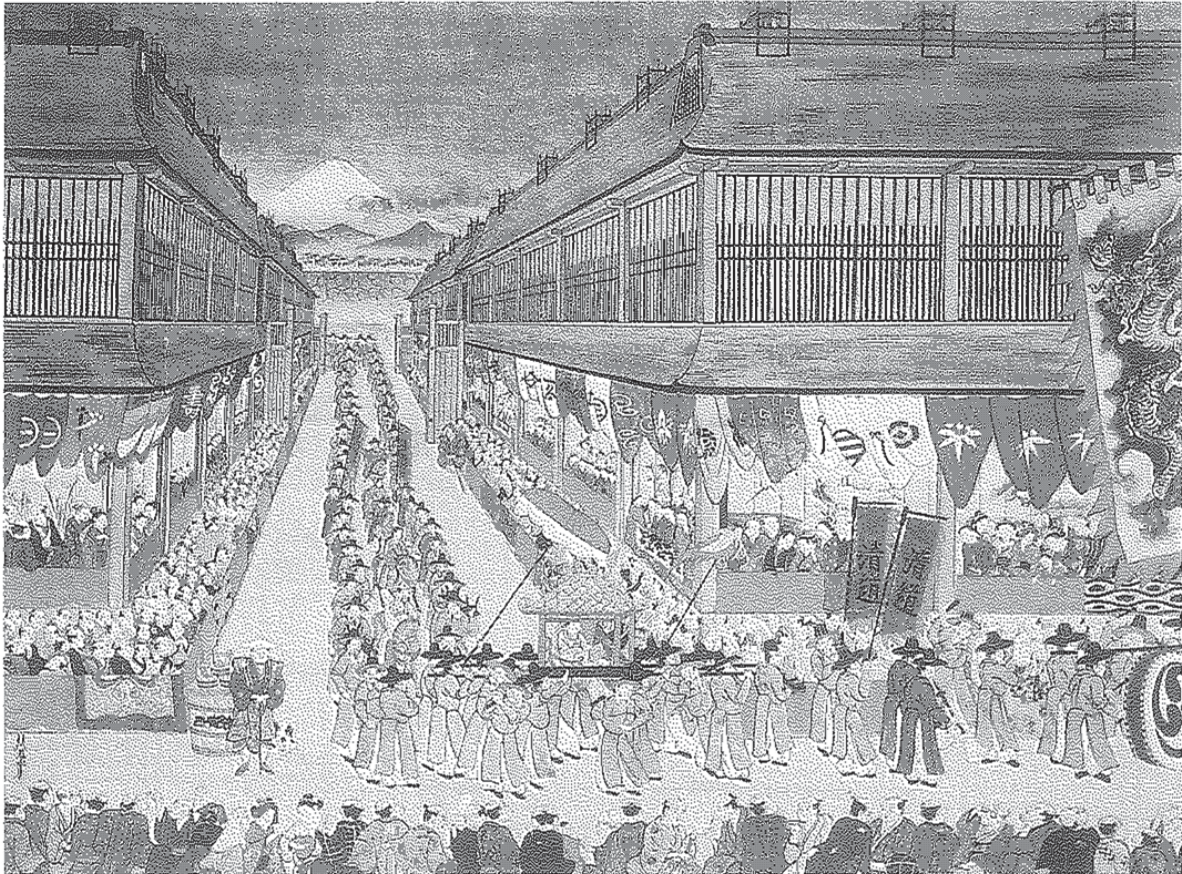
京都で1泊した一行は、払暁<sup>はつぎょう</sup>に宿舎を出発して、800人の正装した対馬藩士警護隊を先頭に「清道」の文字を赤く染め抜いた旗をなびかせ、朝鮮ラッパを吹き鳴らし、銅鑼<sup>どら</sup>を打ち、法螺貝<sup>ほらかい</sup>を吹いて行進します。東海道や中仙道の沿道は黒山の人だかりで、遠くの人、野宿を重ねて見物にやって来たといわれています。

また、信使の宿舎である使館には、地方の文化人たちが馳せ参じ、揮毫を乞い、漢詩の唱酬に歓をつくし、筆談によって中国や朝鮮の政情をさぐり、歴史・文化・風俗をたずねたといえます。

ともあれ、朝鮮通信使の来聘は、鎖国の時代であった当時の民衆にとって、異国の文化に触れる唯一の機会であったのです。徳川幕府も100万両という莫大な出費をして、一行を大歓迎しました。ちなみに100万両を現在の金額に換算すると500億円という途方もない大金になるのです。

雨森芳洲も、正徳元年(1711)と享保4年





江戸の町中を行く通信使行列

(1719) の第 8・9 次の 2 回にわたって真文役（三使の直接の接待役と文書関係の取仕切り役）として、対馬から随行して大活躍をしました。芳洲、44歳と51歳の時のことです。

当時の通信使の旅は、対馬から江戸への往復に5か月もかかりました。芳洲は、この長い旅の道中を信使一行と起居を共にして、親交を結んだのです。しかし、時には「一つのことばの解釈のちがいで、8日間も夜に眠ることができないほど苦んだ」と述懐するごとく、外交官の仕事は、一言半句にいたるまで、一国の命運すら左右する重みをもっていることを痛感する日々でもあったのです。

享保13年（1728）芳洲61歳の時、長年にわたって外交の実務を担当した経験を基に、朝鮮外交の基本方針を示した名著である「交隣こうりん提醒ていせい」を著しました。「朝鮮交接の儀は、第一人情事勢を知り候事肝要にて候」ではじまるこの書は、数々の例証を示しながら、異国の人と交わることの心得をきめ細かに書きつづ

っています。

このなかで、芳洲が繰り返して説くことは、「相手国である朝鮮には、朝鮮独自の文化や風習・趣味や嗜好がある。それを無視して、日本の文化や風習を尺度にした考え方で付合うことは、偏見や独断を生み、誤解を招くことになる。そして、やがては朝鮮の人々からあざけり笑われることになるのだ」と、相手国の国情や文化・風習を知り、尊重する外交こそ、一番大切なことであると強調するのです。そして、「交隣提醒」の結びには「互に欺かず、争わず、真実をもって交わり候を誠信とは申し候」と真心と真心・信義と信義の交わりこそ、外交の基本であると「誠信外交」の根幹を説くのです。

#### 4. すぐれた教育者

享保15年（1730）釜山の倭館わかんで2年間の裁判さい（特使）の任務を終えた芳洲は、一切の公務から退き、子弟の教育と著述に専念します。



藩主義如公に藩政の要諦について上申した、「治要管見」和文の随筆集「たはれぐさ」上・中・下の三巻、朝鮮語通詞養成のために芳洲が行った献議・施策の記録「詞稽古之者仕立記録」以酌庵の僧が録した「芳洲先生口授」

等々、芳洲がのこした数々の著作はこの時代に生まれたものです。

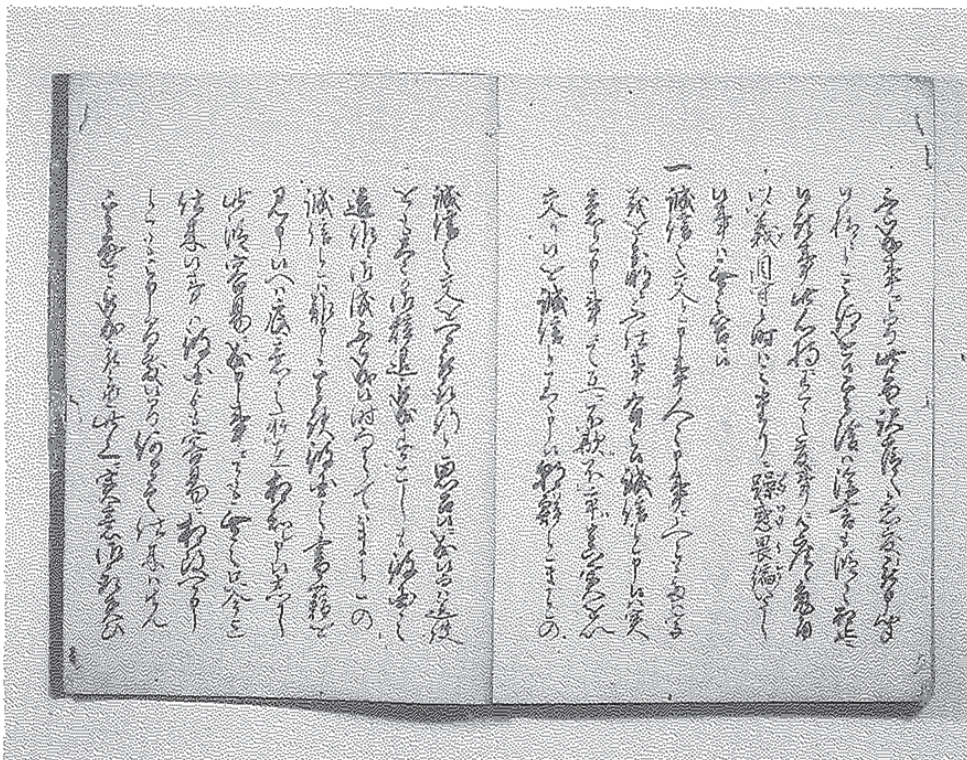
元文4年(1739)長子鵬海に42歳という若さで先立たれたのは、芳洲が72歳の時のことです。以後芳洲は、12歳になった孫の連太郎をはじめ、藩内の子弟の教育に専念しました。

81歳の時にまとめ上げた漢文の随筆集である「橘窓茶話」のなかには、教育者としての芳洲の面目が躍如としていています。例えば、幼児の教育は、一字の訓から音読・暗誦、更には、書写や習字の大切さまで書きのべ「既り易くして倦むことなきを要す、不能者は、必ず強いて督せず」と、子どもの自発的態度を重視する、現代の教育にも通用する教育実践を行いました。

また、「余平素掲げて書生に示して曰く、学は人為ることを学ぶ所以なり」と、学問の目的は、人格の修業にあり、学問をすることによって人徳を高めることこそ究極の目的であると子弟に説き聞かせました。ここに、教育者として、また、学究の徒としての芳洲の真骨頂を見ることができるとのことです。



通使行列中の真文役「芳洲」



「交隣提醒」





東アジア交流ハウス雨森芳洲庵

## 5. 生涯学習の実践者

芳洲は、81歳の時に「古今集」読誦一千遍和歌詠草一万首という誓いを立てました。「歌は今も稽古しておりますが、元より不才の上、老後の勉強ですから、少しも進歩いたしません。元来81歳の時、古今千遍・歌万首という願を立てまして、千遍読みは二年かかって済ませ、一万首は去年こしらえ仕舞いいたしました。子供が『円機活法』（作詩者用便覧）を見て作るも同然の和歌でございますので、詠むとは申しがたく、こしらえると申します。こんなふうによりまして、歌は勿論、歌に似たものもできませんが、ただ、老後の消遣ひまつぶしと思っておるだけでございます」86歳の時に以酌庵の僧にあてた手紙の一節です。凡人には、古今集を一遍読み通すだけでもなかなか骨の折れることです。まして、一千回も、しかも80歳を過ぎた老齢にしてであります。老後の暇つぶしと謙遜する芳洲ですが、生涯に二万首近い歌を詠んだその精進に、学ぶことを生涯の伴侶とした向学のこころと強靱な意志を見ることができるとのことです。

芳洲は、宝暦5年（1755）1月6日、巳刻、

58年間連れ添った妻小河氏に看とられて、儒者として、外交官として、また、教育者として、そして生涯学習者としての88年という波乱の中に充実した人生の幕を閉じたのでした。

「やつれても一本松ときわの常盤にて  
今もかはらぬ志賀のふる里」

芳洲

### 滋賀文化財教室シリーズ No.137号

発行年月日 1993年10月1日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525